

ノンフィクション：蓮舟田邊太一のつづやき（1）
～ 翁の著書「幕末外交談」から ～

2011年7月25日
田邊康雄

幕末の「三舟」といえば、勝海舟、山岡鉄舟、高橋泥舟の三人です。同四舟といえばこれに田邊蓮舟、または木村芥舟が加わるそうです（Wikipedia）。いっそのこと、二人を加えて「五舟」としたらどうでしょう。以下、この呼称を使います。

—— 幕末の五舟

五人は、徳川幕府の立場で、「自分のために」ではなくて「幕府のために」賭命。さらに「幕府のために」だけではなくて「国家のために」命を賭けました。

新選組の近藤勇や土方歳三は有名です。しかし筆者は彼らを、「高く」は評価しません。彼らは幕府のため「だけ」に賭命。それどころか自分のため「だけ」に命を賭けました。

徳川幕府の「兵農分離」政策の下で、「農」の身分である郷土から「兵」の身分である武士になることは至難の道でした。近藤達は、郷土から武士になりたいため、この「至難の道」に命を賭けました。現に戊辰戦争に突入した際に近藤勇は旗本に取り立てられ「念願かなった」と喜び、土方歳三も函館戦争において自分の美学だけに命を賭けました。

—— 蓮舟田邊太一

田邊蓮舟とは岩倉使節団の「一等書記官」、田邊太一のことです。使節団の書記団をまとめる「書記官長」でした。

このことは、旧幕府外国奉行所組頭という地位からして当然です。新政府は1869（明治2）年に外務省を設置しました。旧幕府の外交事務をそっくり引きついたので旧幕府外務官僚の手を借りなければなりません。

太一は新政府に迎え入れられた旧幕府外務官僚の中では、旧幕府時代のポストが一番上で、かつ、最年長でした。だから岩倉使節団書記団の「長」に据えられたことは当然です。

太一は、旧幕臣としては伯爵勝海舟、子爵榎本武揚、男爵大鳥圭介、そして義兄の中央気象台（現在の気象庁）長、荒井郁之助等と共に薩長土肥の明治政府に許されて、かつ、請われて協力した人物です。

—— 田邊太一と筆者田邊康雄の繋がり

筆者は太一の甥、朔郎の孫です。太一には子がなく、その養子にも子がなかったので田邊太一家は断絶しました。しかし現在、田邊家には太一の兄の子孫が34名生存しています。そして太一の遺骨は、田邊家墓所（東京青山）に埋葬されています。

現在筆者は、太一の養子の屋敷跡（品川）に住んでおり、以下の三件の太一の遺品を所持しています。即ち、①幕末外交談の「初版本（稀本）」、②「蓮舟遺稿集（未公開本）」、並びに③「ペリー日本遠征記原文（稀本）」です。

筆者は、太一とは五親等の関係にありますから、2の5乗＝32の逆数、即ち1/32のDNAを田邊太一と共有しています。

—— 幕末外交談

これは1898（明治31）年に発売された田邊太一の著書です。徳川幕府外国奉行所と明治政府外務省の両方に奉職した、我が国「外交官僚第一号」の太一が外務省を退官した後で書いたものです。

漢文の素養豊かであった太一が書いたものですから、格調の高い文章で書いてあります。これを坂田精一という方が、平易な現代文に翻訳されて東洋文庫から1966（昭和41）年に出版されました。

筆者も発売直後に購入。しかしこの翻訳文を読んで落胆しました。なぜならば、坂田さんの翻訳文では、国家のために命を賭けた太一の「憤懣やる方なき思い」が伝わってこないのです。薩長土肥政府が歴史を捏造したことに対する太一の憤懣が伝わってきません。

とくに太一が打った強調文のルビが完全に省略されています。このことも含めて「原文のままにしておいて下さった方がよかった」と、子孫のひとりとして残念に思っています。

しかし太一が章立てした53項目の各項目の後に設置した膨大な「注」と、第一巻の末尾に記載されている「解説」は、よく書けています。今回この作品を書くに当たって大いに参考にさせていただきました。坂田精一さんに感謝申し上げます。

—— 今回の企画

図らずも御案内を受け、「米欧亜回覧の会ホームページ」⇒「会員のページ」⇒「特別寄稿」⇒「①会員による研究資料」欄に掲載していただく機会を得ました。そこで幕末外交談原文の一部を紹介し、紹介原文の中で太一がつぶやく「憤懣」を、そして「息遣い」を太一に代わってお伝えすることにしました。

幕末外交談の原文は、迫力一杯。漢文の訓読を書き下したような文語体で書いてありますが、さほど読解困難な文章ではありません。文語や漢文の素養が十分でない筆者でも読み下せます。細かいところに拘らずに太一の「息遣い」を吸い取る要領で読めばよいのです。行間を読み、かつ、紙面の裏を読み、太一の「つぶやき」を聞いて、書き下すことにしました。「いいね」と声をかけられるよう、頑張ります。

一回当たり、1,600字詰め原稿用紙2～3枚程度にまとめ、月に一回程度のペースで投稿します。幕末外交談は筆者にとって膨大な資料であり、かつ、多忙な仕事の合間に書くのですから、完成まで何年掛るか分かりませんが、現在74歳の筆者が命ある限り投稿したいと思っています。

なお同じ内容を筆者ウェブサイト「田辺コンサルタント」<http://www.tanabe-consul.jp>のブログに掲載する予定です。

—— 作品の分類

幕末外交談という紛れもない「歴史書」を紐解きますが、これに対する解説書ではありません。テキストボックス内に記入する幕末外交談は、原文のままですが、それ以外は筆者の作品です。創作に当たって――、

「正しい歴史認識はない」

と、筆者は考えます。人間ひとり一人が、生物としての自分という「個体」の進化の過程と

して歴史を理解すればよい。百人いたら、百人の歴史観が存在します。

筆者田邊康雄にとって太一は子供の頃から60年間もの長きも亘って、岩倉使節団とともに気になる存在でした。筆者のこれまでの生き方は、太一に倣った部分が多くあります。太一とは時代を超えて気が合う。そこで筆者の歴史観を田邊太一の言葉を借りて紹介させていただきます。ノンフィクション作品です。繰り返します。正しい歴史観など存在しない。

—— 筆者の史観

太一に共鳴する筆者は、幕末明治に関する歴史観を20年前の1991（平成3）年に発行した拙著「びわ湖疏水にまつわる、ある一族のはなし」の中で紹介済です。ここにそれを紹介します。即ち——、

「世界一の不倒距離を誇る直接政治に関わらない天皇家が、（ヒトラー等の）狂信的リーダーの出現を防止している。国民の「お守り」的役割を果たしている。お陰で明治維新では、平和裡に政権交代できました。そして先人の知的遺産が活用できました。これはなんと素晴らしい政権交代システムではありませんか。こんな優れたシステムを創造したとは、なんと賢明な国民ではありませんか」と。

そして文末で以下のように結びました。「薩長藩閥政府にその価値・意義を無視された徳川時代は、すでに世界有数の科学・技術保有国であり、他国に例を見ないユニークな天皇制の下で平和裡に明治時代に継承され、これがびわ湖疏水を可能にした」と。

これが筆者の幕末明治に関する歴史観です。定説とは大きくかけ離れていることは承知しています。今回はその基盤の上に立って、従来の考えをさらに展開します。

—— 岡崎久彦さん

外交問題評論家の岡崎久彦さんがテレビ会談の中で言われました。論じて曰く「歴史とはその時代その時代の人々が、生き残りを賭けて必死に生きた軌跡である。後の世の人が『よい』『わるい』を論じても意味がない」と。

日韓の間で「正しい歴史認識」を持つ必要があるという論議の中で、その動きに水を差されて言われたものです。このお言葉によって筆者も「目からうろこが取れた」思いでした。

従来は、筆者の歴史観を人に憚って開示していました。しかし「はばかる」必要はないと言っていただいたような気がして勇気が出ました。百人いたら、百人の歴史観があつてよいということです。岡崎さんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

次回（第二回）では、まず「幕末外交談」本の「まえがき」を紹介しましょう。